法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<西尾実教授追悼>温顔忘じ難し

下沢，勝井

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
24
(開始ページ / Start Page)
96
(終了ページ / End Page)
99
(発行年 / Year)
1981-02-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019304

〈西尾 実教授追悼〉

温顔忘じ難し

下沢勝井

先生を慕った三〇年

昭和二五年（一九五〇年）といえば、明治二十二年（一八八九年）にお生まれの西尾実先生は六十一歳という勘定になる。あのときがそういうお年であったのかと私は今、目をとじて思う。あの年から三〇年、九〇歳で先生が亡くなられるまで、私は執拗に先生につきまとった。ずい分迷惑に思われるときがあったに違いない。先生はそうは思われても表情に出される方ではない。私たちはそれをいいことにしてたいへんズーズーしかった。先生はそうした私どものズーズーしさをも愛してくださった。先生は私にとって、学問の師という以上に人間の教師といった感の方が深い。

私が法政大学の夜間部に籍をおいたのは、そこに西尾実先生や小田切秀雄先生がおられたからである。一九五〇年代にはまだ先生を求めて学生たちが集まる風があった。今はそんな気風がどれだけ残されているのだろうかと思う。

「法政の日本文学科は先生がすばらしい。」私が学生の頃は、他の大学の人たちからこういわれた。全くその通りで、近代の片岡良一先生や猪野謙二先生、近世の近藤忠義先生や重友毅先生、中世の永積安明先生、古代の西郷信綱先生、みな私どもの先生だった。鬼才・広末先生も益田先生もまだ法政に参加されておられなかった。いや広末先生はおられたが、教えを受ける幸運には恵まれなかった。このような方々から教えを受ける私たちはぜいたくだった。「法政は先生がすばらしい。」とは〈先生に比べて教えられている側はそれほどでない〉という反語であって、私などはその適言に肩をすくめなければならない筆頭だが、こうした先生方から指導を受けた方たちの多くが、現在母校で活躍されておられる通り、教師がすばらしければ弟子も又すばらしい人も出るのは当然であろう。

その中でも西尾実先生の学恩を語るにふさわしいすばらしい方は

多い。特に杉本圭三郎氏や片桐登氏などはその最適任の方のように思われる。なのになぜ、この貴重な紙面を私に与えてくださったのかが、本当は私にはわからない。恐らくプライベートなかたちで先生に接する機会もあったであろうから、そこを語れといわれているのかと理解してみる。

教室での先生

先生を前にしたときの学生たちは、なぜああ姿勢がよかったのだろう。先生が壇上におられる間は聴く側の背筋も又きちんと伸びていた。〈西尾実の鍛練主義が簡単にのり移りやがって〉あの頃、すべてを疑ってかからなければ承知できなかったエセ・アプレゲールの私は、わざとくずした体で最前列に居座わり、一語一句反語的に先生のことばを聞くことに努力していた。そのくせ一年前まで信州の山奥で小学校の教師をしていた私は、そこで一度だけ先生の講話をおききして、やもたてもたまらず先生をしたって上京してきたはずなのに、上京後の私はしだいにさま変りしてきていた。そのくらいなら出席しなければよいようなものの、先生の講義を聞かなければやはり寂しかった。出席すれば、いつまでも考え続けてみなければならないことばにたびたび出会わされて参った。

後年先生は、「反撥心をかくさない聴き手のいる教室は話しがいがあった。」といわれ、私は人しれず赤面した。そして「しかし、ざわめきを消してくれない教室の場合は、自分の未熟さを反省させられた。」ともいわれた。私には今でも、出講まえの先生が、教官室で息をととのえて静かに控えておられる横顔が目に浮かぶ。先生は知りつくされたテキストでも、出講前には必ず眼を通されたといわれている。

ざわめきを消し、耳を澄ませていく教室の実現とは、聞き手の心で話す用意の整った教師の条件をさすことばであろう。世阿弥のいう「離見の見」の先生なりの生活上での実践であられたのであろう。

晩年の先生は眼がお見えにならなかった。このことを私は不埒にもいくどありがたいと思ったことだろう。この上眼がお見えになられたのではたまらない、そう私は思わされた。こわかった。私が先生のお眼が失明に近いのを見破ったのは、三〇年ごろ、大学院のゼミの席でであった。あの頃たしか履修届には、先生が聴講を許される自署が必要であった。先生にはその自署の欄がおわかりにならなかった。その上西尾の尾と実とが少し重なられた。

眼がお見えにならなくなってから、先生は学生が提出するレジュメを、両手でジット捧げられて、紙の重さをたしかめられてでもおられるようなしぐさをなさった。それからゆっくりと右手の手のひらを文字の上におかれた。先生は決っていつもそうされた。ゼミナールでの先生のご発言は決して多くはなかった。しかし発言なさるときは、私たちの研究が小さな坂やカーブにさしかかった折のようであった。「車の後押し」と先生がいわれる、その力添えが必要な

ときであった。

先生を囲む国語教師の会

昭和三十五年（一九六〇年）は安保の年であった。その年先生の方からも希望されて、少人数で国語教育の実践を出し合い、先生の理論を実践の中で検討してみようという企画を出された。私が連絡係をお引き受けした。

当時のメモをみると、十五人の方に呼びかけて、十三人の方が参加されている。法政大学院の卒業生の方や、先生の前任校の東京女子大出身の方、先生と筑摩の国語教科書を編まれていた大村浜さんなども参加された。しかしその後吹き荒れた学園紛争や、先生のご健康のことなどもあり、翌年からは先生のお宅を開放していただいて研究会を続けた。しかしその後研究会の内容は少しずつさま変りして、西尾理論による近代日本文学の作品研究といった性格が強くなった。構成メンバーも少しずつ入れ替り、この会は先生が亡くなられた今もなお続いている。太田正夫氏のお宅をお借りしている「文学と教育の会」がそれである。先生を囲む会には、やがて先生のご息女の山木ゆり女史や、おくさまも加わられたときもあった。この会のことはいくつかの雑誌に報告させていただいているので重複はさけたい〈注〉。が、そこで私たちが学習させられたものは、文学研究の方法、特に作品研究における西尾理論の深さと柔軟さとについてであった。書かれてある作品以上の読みも、共同の研究の中では可能である事実を発見させられた興奮は今も忘れがたい。

先生が説かれた形象理論、特に作品研究の方法としての主題・構想・叙述理論を口にされる方は今は少なくなった。この用語は今ではたしかに古めかしい。しかし私には文芸作品の読みの方法として、啓発されるところが大きい。この理論を批判される方の中には、先生の説かれる形象理論を固定的、教条的に受けとられての、誤解の上の立論がままあるように思われる。あるいは新規の文芸用語や教育用語を導入されて今までとは異なる新しい作品へのアプローチが可能ででもあるかのような研究や実践に接することもある。しかし駆使されたことば以上の新しさを発見させられる機会はあまりない。それのみか反って書かれている作品事実も無視されての、論者の側の都合による論評がめだつようにさえ思われるがどうであろうか。幸いなことに私は、そのような論断にあまり左右されないですんでいる。これも、先生とご一緒に、数少ないすぐれた作品を、時をへだて、場を変えて、自分が読みとれるところまで読みすすめてみる生活化された学習を、先生の理論を通して教えていただいたからだと思っている。

病床での先生

先生が、先生の文体ではない文章を口述された時があった。私は筆を止め耳を疑った。〈老いる〉ということが、こんなにも無惨であることを知らされたのは、相手が「西尾実」であるだけに私には

衝撃であった。

これも亡くなられる数年前のことだった。先生は青年時代の畏友・森下次郎氏の思い出を語られていた。氏は東大在学中の先生に、学資を送り続けられていた小学校教師時代の先輩である。静かに話されていた先生は突然おえつし号泣された。ほんのわずかの時間ではあったが、本当に号泣ということばそのままの泣かれ方をされた。どうしようもなかった。病床の先生と対座していて、先生が涙を見せられたことは三度あった。しかし三度ともその訪問の前後に限られた。一度は令兄の死を語られた時だった。医者を志され苦学されていた令兄が修業中病死され、少年の先生が、その死の事実をお母さまに告げられず、ひそかに胸中に秘せられていた夜の苦しみを語られていたときだった。二回は森下氏の思い出の折だった。しかし号泣される先生を前にしたのは一度だった。後は臥せられている先生の見えないお眼から涙だけがあふれ枕をぬらした。しばらく無言でおられた先生は、「失礼した。」と小さく云われた。

〈まもなく先生は死んでしまう〉と私は思った。しかしそうした激しい感情の起伏を見せられたのは長くはなかった。半年もしないうちに、いつものゆったりとした慈父のような先生がもどってきた。ほほえまれる表情がことにすばらしかった。前立腺肥大で手術を受けられた先生は、しばらくの間ヘルペスの発疹になやまれ、お顔の左半分がはれて痛々しかった。「僕は眼が見えなくても苦労したということはあまりないが、今度のヘルペスには参ったよ。しかしその痛みに耐えて勉強を続けていると、一種の壮快感もあってねえ。」ともいわれた。「生涯稽古」という古人のことばが、先生とお会いしている度に私の胸に深く下りてきた。

昭和五十四年（一九七九年）四月十六日、後二十一日で満九十一歳になられる先生は、ご家族のみなさんの総力をあげてのあたたかい看守りの中で、眠るような大往生を遂げられたとお聞きした。

九歳の先生が、お父さまと一緒に十里の道を歩き、はじめてにぎやかな町・飯田へ出てゆかれる朝、顔を輝やかせて阻径を走る先生に、「走ってはいかん、走ってはいかん。」とお父さまはさとされ、疲れて残る行程を尋ねられた先生に、「後の足を前に、後の足を前にと踏み出して行けばやがて着く。」と教えられたというお話を、私は幾度おききしたことだろう。

今は白装束にわらじをつけられて、新しい黄泉の道を歩まれている先生は、今どの辺を歩いておられるのだろうか。古人の誰とお会いになられているのだろうか。先生！ふり向いて欲しい。先生の温顔が忘れられない。

（注）先生に対する回想文を「国語教育研究」八十四集（日本国語教育学会）「下伊那教育」第一二三号（下伊那教育会）「日本文学」三一九号（日本文学協会）に掲載しました。